

2025年3月29日13時～17時

講演90分

先生のための春の経済教室

授業に役立つ経済学：

エコノミストと考えるサステナビリティの視点を生かした授業の作り方

(慶応大学三田北館3F大会議室+オンライン)

# サステナビリティの経済哲学

## ー サステナビリティの考え方を中高生にどう伝えるか ー

松島 齊

東京大学経済学研究科教授  
社会的共通資本寄付講座特任教授

## 「サステナビリティの経済哲学」岩波新書 2024年8月



- 東京大学統合報告書2024：活動報告「ゲーム理論で実現する持続可能な社会」
- 慶応大学経済学部入学試験問題「小論文：課題文 I」2025年2月13日実施：「サステナビリティの経済哲学」第1章3節第2章6節
- 南山大学国際教養学部国際教養学科特別入試審査問題「小論文」2024年11月30日実施：「サステナビリティの経済哲学」第4章4節

## 1. 教員のみなさまの疑問点

- |                   |                      |
|-------------------|----------------------|
| サステナビリティ＝お金の勉強？：  | 経済とサステナビリティの関連性が見えない |
| サステナビリティは抽象的過ぎる？： | 何を教えればいいのか不明確        |
| サステナビリティ＝環境問題？：   | 社会や経済とのつながりが見えない     |

## 1. 1. サステナビリティはお金に関係があるのか？

- 中高教育では経済教育の機会が少ないが、機会があればお金の勉強をしたい
- しかしサステナビリティへ意識が行かない
- 「経済＝実生活で使うお金の話」と直感的に捉えられがち
- 一方、「サステナビリティ＝環境問題」として扱う傾向が強い
- 「サステナビリティ＝経済問題」という発想が必要
- サステナビリティの実現には経済の理解が不可欠である

## 1. 2. サステナビリティは抽象的すぎるのでは？

- サステナビリティという言葉は浸透しているものの、具体的な概念はわからない。そのため、授業への落とし込み方がわからない
- サステナビリティという言葉は、環境、経済、社会、倫理、文化といった多様な分野を含むため、教員自身がどこに焦点を当てるべきかわからない
- 具体的な教材やカリキュラムが不足していて、「サステナビリティをどう教えるか」という指導指針が不明確
- 結局、各教員の裁量に委ねられがち

### 1. 3. 「サステナビリティ＝環境問題」の誤解

- 「サステナビリティ＝環境問題」という認識が強く、経済や社会との関連性は認識されていない
- 日本の教育現場には、サステナビリティが環境教育の一部として扱われてきた歴史がある。そのため、サステナビリティも「エコ活動」と同一視される傾向がある
- SDGs の教科書的な扱いが環境重視に偏り、「気候変動」「再生可能エネルギー」「生物多様性」などの環境要素が強調されがちである
- 「貧困」「ジェンダー」「労働問題」「社会的不平等」といった社会・経済的な側面は後回しになりがち
- 「サステナビリティ＝環境問題」ではなく、「サステナビリティ＝社会（＋経済＋国際＋環境）システム全体の持続可能性」と再定義する必要がある
- サステナビリティには「環境・経済・社会」の3つの柱があることを明確に伝えることが重要

## 1. 4. サステナビリティは知識の伝達か？

- 日本の教育は「教科ごとの縦割り」が強い。環境問題は理科、経済は公民・社会、倫理は倫理・道徳の圏で扱われる
- 経済教育とサステナビリティは別の分野として捉えられ、教育課程の縦割りによって、経済とサステナビリティの関連性を教えられる機会が少ない
- サステナビリティ教育は、単なる知識の伝達ではない
- 教科横断的なカリキュラムの構築が不可欠で、このことこそがサステナビリティ教育を実現する鍵になる
- サステナビリティ教育は、単なる環境問題ではなく、「社会・経済・環境の持続可能性」の視点を統合することが重要になる

## 2. サステナビリティ教育の問題の本質

### 2. 1. 日本の教育構造の再検討

- ・ サステナビリティ教育の本質は、社会の構造そのものを見直し、「持続可能な社会をどう作るか」を考えることである。そのためには、環境・経済・社会の3つの柱を同時に扱う必要がある。しかし、現状の日本の教育ではこれらがバラバラに教えられている
- ・ 分断された教育構造自体がサステナビリティの本質を伝えられない主要因になっている：
  - ・ 「サステナビリティ＝経済と関係ない」と思われているなら、それは経済教育とサステナビリティが融合されていないことの問題
  - ・ 「サステナビリティ＝環境問題」と思われているなら、それは社会的・経済的な視点が欠落していることの問題
  - ・ 「サステナビリティが抽象的」と思われているなら、それは具体的な教材や教え方の問題
- ・ **教員の認識が足りないのではなく「日本の教育の枠組み自体がサステナビリティを正しく捉えるように設計されていない」ことがサステナビリティ教育の本質的な問題である**

## 2. 2. では、どうすべきか？

- **サステナビリティ教育の根本的な方針を変える必要がある**
- **教科を超えた「統合的な教育」を導入する**
  - サステナビリティを「環境・経済・社会」の三本柱で考えることを基本にする
    - 例. 「エシカル消費」とは？：
      - 「環境（生産プロセス）」
      - 「経済（価格や企業の戦略）」
      - 「社会（労働者の権利）」を同時に考えさせる
  - 「お金の勉強」としてではなく「持続可能な社会の制度設計」として教える
  - 環境問題に限定せず「社会システムの問題」として扱う
- **疑問を「もっともなもの」として受け入れるのではなく、「なぜこういう疑問が出るのか？」を深く考えることこそが、本当に必要なサステナビリティ教育の出発点となる**

## 2. 3. 教育現場でのアプローチ（1）：課題解決型→探求型→変容型

- 単なる問題解決ではなく、思想・哲学的・概念的変容を促す問いかけ
  - 「〇〇の問題を解決しよう」ではなく、「そもそも私たちは何を『問題』と考えるべきなのか？」という問いから始める
- 個人の行動変容だけでなくシステム変革の視点を問う
  - 「何をすべきか？」ではなく、「どのように世界を見ればよいのか？」を考える
  - 「人間は自然を管理する側か、それとも共存する存在か？」
- 「なぜサステナビリティが必要なのか？」という深い哲学的問いを扱う
  - 「なぜ成長を追求するのか？」
  - 「持続可能でない社会はなぜ問題なのか？」
  - 「幸福とは何か？」

## 2. 4. 教育現場でのアプローチ（2）：資本主義を批判的に思考する

- ・「資本主義のあり方」や「企業の役割」について批判的に考える

- ・企業がどのように環境・社会課題に取り組むべきか？
- ・株主資本主義 vs. ステークホルダー資本主義 vs. コモンズ経済
- ・競争市場がサステナビリティを推進するための制度設計

- ・「市場と国家の二元論を超えた新しい枠組み」について考える

- ・「サステナビリティは経済成長と対立する」という誤解
- ・先生方自身の「教育観」や「経済観」を再考する

- ・お金を「自分が得するためのもの」と考えるのではなく、「社会全体の持続可能性に影響を与えるもの」として考える

- ・サステナブル金融リテラシー： 「お金＝自分の生活のため」という意識から  
「お金＝社会の仕組みを動かす力」へ

## 2. 5. 教育現場でのアプローチ (3): 多様な哲学・倫理

- ・日本の教育や社会システムは欧米の哲学や倫理が中心になる傾向があるが、そのことを見直し、変えていく
- ・仏教・イスラム・ヒンドゥー・Ubuntuなどの視点を導入し、「宗教＝歴史」から離れて、現代的意義の高い多様な考え方として、積極的に扱う
  - ・例：Ubuntu（南部アフリカ、マンデラ、ツツ、Linux Ubuntu OS）

### Ubuntu 哲学

共同体主義（関係性重視）

「私は私たちがいるからこそ存在する」

I am because we are.

共感と連帯によって幸福を追求

調和と和解が重要

### 西洋の個人主義的哲学

個人主義（独立性重視）

「我思う、ゆえに我あり」

（デカルト）

自由と権利によって幸福を追求

競争と成果が重要

## 3. サステナビリティとは？

### 3. 1. 気候変動問題の深刻化と世界市民の関心の高まり

- ・ 世界市民に「他人事でない当事者意識」の向上
  - ・ 倫理的責任、サステナビリティに貢献したい、サステナビリティの大義
- ・ 未来世代、現世代、地球環境
- ・ 環境・社会・経済の三位一体
  - ・ 経済的サステナビリティ： 持続的な資源管理、持続的な経済成長 ...
  - ・ 社会的サステナビリティ： 貧困、格差、不平等、健康、人権、教育、食、住環境 ...
  - ・ 環境的サステナビリティ： 気候変動、生態系、生物多様性 ...
- ・ システム的相互依存
  - 環境・社会・経済システムは相互に依存していることを探究
  - 探究学習、変容学習、LCA
  - 菩提心（全ての生き物を思いやりみなが幸せに生きられる未来のため自ら進んで行動する心
  - cf. 戦略的相互依存（ゲーム理論）

### 3. 2. コモンズあるいは社会的共通資本（宇沢弘文「自動車の社会的費用」）

- ・社会的共通資本（コモンズ）とは：

すべての人々がゆたかな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を持続的安定的に維持することを可能にする社会的装置

自然資本： 大気、森林、水資源、種絶滅回避、気候変動、温暖化 ...

社会インフラ： 水道、電力、交通、デジタル空間 ...

制度資本： 教育、医療、食料、金融 ...

- ・持続的管理： 「過去から受け継ぎ、現代で洗練させ、未来に受け継ぐ」

- ・コモンズの悲劇（フリーライダー問題）：

コモンズの管理は大切だが、自分からは進んでやりたくない  
みんなが他人に負担を押し付けると、いずれコモンズは消滅する

- ・宇沢問題： 人間的に魅力ある社会を持続可能にするためには、コモンズ（社会的共通資本）のための「制度設計」が不可欠である。

全人類の未解決問題：どのような仕組みを設計すればいいのか？

### 3. 3. 「誰一人取り残さない」原則

- ・救命ボートの倫理：

「200人が被災し、100人（先進国）が100人乗り救命ボートに乗り残り100人（途上国）は海上で助けを呼んでいる」

生態学者ハーディンへの非難： コモンズの悲劇は避けられない  
気候変動の悲劇は避けられない  
早い者勝ち倫理：先進国は途上国を見捨てていい

経済学者への非難： マルサス、ケインズ、サマーズ  
低生産性（低GDP）が犠牲になる倫理

- ・ 宇沢問題に世界中で真剣にとりくもう！

## 4. SDGs（持続可能な開発目標、2015～）

- ・ 国連は「安全保障第一」から「サステナビリティの実現」へシフトチェンジ
- ・ 世界市民に「他人事でない当事者意識」の向上をうながすスローガン
- ・ 「サステナビリティのための大義」のヒントを提供
- ・ 17の目標は全てシステムの的に相互依存していることの認識



## 4. 1. 営利企業の役割の重視：Who Cares Wins！

- 短期的営利の追求 → CSR（企業の社会的責任、非営利財団、寄付）  
→ 「Who Cares Wins」こそが重要！
- 本業を通じてサステナビリティに貢献する企業が市場競争に勝つ！
- そうなるようにグローバル市場を（みんなで）作っていこう！

## 4. 2. 官民学のパートナーシップ（目標 17）

- 多様性と包摂の時代： 対立から共生へ  
競争だけでなく協働促進へ
- CSV（Creating Shared Values、共有価値創造）
- 透明性、民主性、コミュニケーションの強化
- トップダウンオンリーからボトムアップ、フラット型ガバナンスの重視へ

## 4. 3. GDP 偏重からの脱却、社会的価値の可視化

- ケアの倫理： 介護労働は（尊敬されるも）社会的地位が低く、しかも低賃金  
しかし介護労働の社会的価値は高い  
なぜ？どうやって改善？
- 人的資本再検討： GDP に貢献する人材育成でなく、サステナビリティに貢献する（ケア  
をする）人間開発へ  
地域活性化に貢献することで SDGs（ESG）に上手に対応できるような  
生産性の高い人材育成ではなく（！）、地域活性化に積極的に貢献す  
るリーダーシップの育成へ

## 5. サステナビリティの意味する「長期」

- ・ 今までの資本主義における長期的利益の考え方：

「今の短期利益」だけでなく「将来の短期的利益」も重視せよ

例： 金融システム安定化が企業の長期的投資を促進

- ・ サステナビリティの長期的便益とは？：

今日の行動が将来世代や地球環境に及ぼす影響を探究せよ

菩提心、倫理的動機、行動変容、世界観変容

例： ESG 投資、グリーンボンド、インパクト投資

循環経済ファイナンス、Transformative Finance

- ・ 改めてサステナビリティとは？：

不測の事態が生じても長期的便益追求の手を緩めないこと

例： トランプ時代においてもサステナビリティの実践をやめない

## 6. 倫理と経済、近代化とサステナビリティ

- 道徳なき経済は犯罪である。経済なき道徳は寝言である（二宮尊徳）
- 利益は大切だが理念がなければ犯罪である。理念は大切だが利益がなければ寝言である（渋沢栄一）
- サステナビリティなき経済は犯罪である。経済なきサステナビリティは寝言である（松島 齊！）
- 日本の近代化（モダン）：
  - リニアエコノミー（大量生産、大量消費）
  - 「政府の統制＋民間主導」
  - 「公共財」の整備
  - 「儒教道徳」に価値観を帰一化
- サステナビリティ（ビヨンド・ポストモダン）：
  - サーキュラーエコノミー
  - 「民間主導＋官民学パートナーシップ」
  - 「社会的共通資本（コモンズ）」の持続的管理
  - 「大義のプラットフォーム」による共有価値創造（CSV）

## 7. サステナビリティ経営

- Who Cares Wins : 状況に依存した多様な企業形態、所有構造、企業戦略
- 社会的インパクト : 企業理念、インパクト目標、サステナビリティプラン  
共有価値創造 (CSV)  
共感 (sympathy)
- SDGs(ESG)対応 : 社会的インパクトと SDGs 全体との適切なバランス
- パタゴニア (非上場) : 目的信託 : 地球を救え  
生活賃金と雇用の保障  
マイノリティや社会的弱者の雇用
- ユニリーバ (上場) : コミュニティ (入会地や協同組合) の精神を現代に引継ぐ  
サステナブル・リビング・プラン  
サーキュラーエコノミー

## 8. 新しい資本主義（ビヨンド・ポストモダン）

### 8. 1. ポストモダン VS ビヨンド・ポストモダン

#### 今までの資本主義（ポストモダン）

ビジネスアントレプレナーの発掘  
価格の情報機能  
限定された政府の役割  
経済的効率性にもとづく市場淘汰  
効率と公正の潜在的対立  
外部性の軽視  
株主重視  
利害関係者の調整バランス  
短期的利益  
経済的インセンティブ  
人的資本経営（フリードマン）  
トップダウン  
カイゼン

#### 新しい資本主義（ビヨンド・ポストモダン）

社会的アントレプレナーの発掘  
非価格情報の整備  
官民学パートナーシップ  
サステナビリティへの貢献にもとづく市場淘汰  
効率と公正の統合的解決  
経営戦略としての内部化  
ステークホルダー型  
共有価値創造（CSV）  
長期的便益  
倫理的動機の持続化  
サステナビリティに貢献する人間開発（シュルツ）  
民主性、透明性、コミュニケーション  
大胆な環境イノベーション、行動変容

## 8. 2. 経済の主導者・国家と市場の関係・経済の性質・企業の倫理・代表政策

時代	経済の主導者	国家と市場の関係	経済の性質	企業の倫理	代表政策
近代 (モダン)	国家+市場	国家がインフラ整備の イニシャティブ 企業主導で発展	国家主導の 成長モデル	道徳経済合一 儒教道徳	渋沢栄一 鉄道・銀行モデル
ポストモダン (新自由主義)	市場	国家は市場に介入せず 規制緩和	グローバル競争 短期的利益	短期的利益 CSR・ブランド戦略	EUの自由市場政策 アメリカ規制緩和
ポストモダン崩壊期 (国家の復権)	国家+市場	国家が市場を守る 保護主義	パワーポリティクス	短期的利益 反サステナビリティ	トランプ
ビヨンド・ポストモダン (持続可能な市場)	国家+市場+市民 パートナーシップ	社会的共通資本 サーキュラーエコノミー	持続可能な市場と 社会の融合	サステナビリティ CSV	EUグリーンディール

## 9. トランプ：ポストモダン崩壊期

「反サステナビリティ（トランプ）」と「(浅い) サステナビリティ（Woke）」の狭間  
「分断+対立+秩序崩壊」の転換期

### ・イーロン・マスクはサステナビリティ経営か？

- ・ 技術偏重：                    テスラ、X、スペース X、スターリンク
- ・ 菩提心欠如：                サステナビリティが営利的独占のための道具に

### ・データ・ドリブン（AI）vs 共感

- ・ 「男の子は自動車、女の子はお人形」から如何に脱却できるか？

### ・ジェンダー平等、ダイバーシティ、GDP 信仰

- ・ 近年のノーベル経済学賞（Goldin, Acemoglu）はサステナビリティ経済学か？

### ・内なるトランプ

- ・ グリーン気候ファンド（Green Climate Fund）は見せかけか？